に流入した．また，一部の村民は現金と引き換えに土地を手放したが，今後どのように生計を立てていくのか，定かではない．確かなのは，高速鉄道建設は中国農村部にこれまでとは異なる大きな影響を与えているということである．これによって，中国農村社会はどのように変化していくのか，今後も注目していきたい．

アカの正月をともに過ごして

佐　野　航　平 *

私はラオス北部，中国と国境を接する山間盆地に暮らすアカの人たちの農村に住み込み，現地調査を行なっています．彼らはラオスだけでなく，中国雲南省南部やタイ北部，ミャンマー，ベトナムに広がる山間地に居住しています．彼らの新年は西暦でいうと 12 月です．そんな彼らの正月をのぞいてみましょう．

朝はトントンと音が聞こえます．餅を搗く音です．踏み臼を使って皆で搗くと 2 分もすればもう餅になります (写真 1)．昔はもっとあったという踏み臼も，今では村に 10 基もありません．踏み臼の主要用途である米の籾すりや精米を機械で行なうようになったからです．各世帯で交代して踏み臼を使い，餅を搗きます．

出来た餅はエゴマの粉をまぶし丸く形を整えます．エゴマは餅が手に付くのを防ぐ役割とともに，文化的価値も含んでいるようです．彼らが言うには「餅はタイ系の人たちも搗くが，エゴマを使うのはアカだけであり，エゴマがなくなればアカでなくなる」とのこと．彼らの焼畑にはエゴマが多く植えられていますが，その理由のひとつが年中行事ごとに食べる餅にまぶすために必須であるからです．餅は丸く形を整えた後，干します．干して硬くなった餅は焚火で焦げないように気をつけて焼き，日本と同様に餅が軽く膨らんだところで食べます．エゴマの風味が香ばし

写真 1　踏み臼を用いた餅搗き

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

く，老若男女皆食べます．また砂糖をまぶして食べる人もいます．

もち米は丸太をくりぬいて作った蒸し器で蒸します．普段はうるち米を同じ蒸し器で蒸して食べています．うるち米を炊くのではなく蒸して食べるのは珍しいと思い，理由を尋ねてみました．「炊いたお米は，炊きたては美味しいが冷めると硬くなり不味くなる．蒸したお米は冷めても程良い硬さのままで美味しく食べられるし，持ち運びにも便利だから」という答えが返ってきました．米にもまだまだ私の知らない食べ方があるのだと実感しました．

餅搗き以外にも正月の準備として肉料理の調理が進行しています（写真 2）．今年は牛 1 頭と，水牛 2 頭を皆で手分けして購入し，屠殺しました．暴れないように足を紐で縛り，首の動脈を鉈で切ります．牛の鳴き声と最後の抵抗の様子が見慣れていない私には衝撃でしたが，村の人たちは皆笑顔です．その後は慣れた手つきで皮を剥ぎ，肉塊に切り分けていきます．骨付き肉や内臓はスープに，他の肉はミンチにして食べます．生のミンチ肉に血液を混ぜた料理もあり，私は食べるのが不安でしたがショウガなどのスパイスによる味付けで食べやすく美味しい料理に仕上がりました．肉は最大の御馳走で頭部や皮など食べることが出来る部分は全て利用します．

写真 2　牛肉の調理

餅も肉料理もお酒も準備が整うと各戸で宴会です．近隣の村から親戚やお客さんが招待され，皆で酒を飲み語ります．また広場で音楽の演奏と踊りが始まると，皆広場に集まります．調査村はラオスの主要民族であるラオと同様にラオス語やタイ語の歌を流し，女性と男性でペアになって踊ります．宴会は夜まで続きました．客が帰る時には餅やお菓子などのお土産を渡します．

アカの人たちの正月には日本人には想像できない面白い点があります．村によって三が日の日程が違うのです．つまり今日はこの村が正月で宴会があり，明日はまた別の村が正月で宴会があるということです．正月だけでなくブランコ祭りなどその他の年中行事の日程も村の長老によって決められるため，村によって日程が違うのです．日本では西暦や旧暦の正月が，ラオスではラオ暦の正月が同時に皆で祝われますが，アカについては全体で共有する正月がないようです．その理由は，村ごとの独立性なのではないかと考えています．おかげで調査地域の他村の正月にもいくつか参加することが出来ました．村によって違いがあるようで，別の村ではアカ語の歌を流し，アカの伝統衣装をまとった少年少女が踊りを披露していました（写真 3）．

調査村の人たちにどうして伝統衣装を着ないのかと尋ねたところ，「皆が着ていないか

写真 3　他村でみたアカの伝統衣装を着て踊る少年少女たち

らだ．お前も着たいのなら貸すぞ」と答えられました．皆がＴシャツにズボン，女性は市場で売られているラオの伝統衣装であるシンと呼ばれる巻きスカートを着ている中で，アカの伝統衣装を着るのは恥ずかしいかもしれません．年配の方は「昔は自分たちで育てた綿を紡いで，織り，染色し，裁縫した服を皆着ていた．しかし時間がかかり，疲れる．今は市場で服が手に入るから楽だ．しかし結婚式の時は伝統衣装を着るし，亡くなった人に着せる服は必ず伝統衣装だからこれからも作り続けるよ」とおっしゃる方もいました．すぐに伝統衣装がなくなるわけではないですが，着る機会がこれからも減っていくことは予想できます．

伝統の変化として他にも住居の変化が挙げられます．アカの伝統的な住居は高床の居住空間と，土間がひとつの茅葺屋根の下にある半高床式の家屋でした．しかし調査村に唯一あったこの伝統的な形式の家屋は，私の滞在中に解体されてしまい今は残っていません．現在は茅葺であっても，土間のない高床式の家屋になり，また多くの世帯がラオのように高床式でトタンやタイル屋根の家屋に建て替えています．さらにお金に余裕がある世帯はコンクリートで新居を建てています．現在住んでいる茅葺の家屋をラオのタイル屋根の家屋に建て替えたいという人に茅葺の家屋も美しいと思うと言ったところ「親戚や友人を招く時に恥ずかしいからやっぱり嫌だ」と言われました．このような思いがある限り，ラオの高床式でタイル屋根の家屋，そしてコンクリート製家屋への変化は止まらないでしょう．

このような変化の原因はさまざまです．調査村では 2006 年から中国向け輸出用サトウキビの栽培を開始しました．サトウキビ栽培導入以前の，焼畑と家畜飼育や狩猟採集を中心に行なっていた暮らしと比べると現金収入は格段に増えました．2009 年には 100 年以上住んでいた山頂部から現在の村がある盆地の低地部に移住しました．バイクがなかった頃は山頂部から片道 4 時間かけて町の市場に歩いて行っていましたが，現在はバイクに乗ればたった 15 分で市場に行くことが出来ます．2010 年に簡易水道が，2011 年には電気が通ったことでさらに便利になり「山頂から平地に移住して良かった」と多くの村人は言います．中国向け輸出用サトウキビ栽培世帯は増え続け，現金収入も多くなり，携帯電話やバイクを購入し，家屋を建て替えることが出来るようになりました．また電気が通ることでテレビを見ることも出来るようになり，ラオスやタイの番組を通して世界中の情報を得るようになりました．このような状況の中では市場で購入した衣服を着，茅葺の家

屋を恥ずかしく思うのも自然な流れかもしれません．

日本も茅葺どころか瓦の家も少なくなり，和服を着ている人も稀です．変化はどの地域にも起きています．よってアカの人たちの変化について私が口を挟むべきではないし，また正しいもしくは間違っているという判断が出来るものでもないと考えます．これからもアカの人たちは村ごとに日にちが異なる正月を祝い続けるでしょう．祝う気持ちや習慣が残れば見かけにこだわる必要はないとも思います．しかし餅搗きの様子に私が郷愁を覚えたのは事実であり，彼らの伝統的な衣食住が無くなっていくのを悲しいとどうしても思ってしまいます．

「電話彼氏」を婿にする

──ウズベキスタンの結婚事情──

宗　野　ふもと*

ある日，ホームステイ先の住み込みお手伝いの娘ハフィザを訪ねてくる夫婦があった．2人は「ソウチ」で，ハフィザを息子の嫁にと，訪ねてきたらしい．ソウチとは花婿候補側の人間で，花嫁候補の両親に会い結婚を申し込む役目を担っている．今回のように両親である必要は特になくて，親戚や友だちがソウチとなることもある．ウズベキスタンでは，結婚話は恋愛結婚であれ見合い結婚であれ，ソウチが花嫁候補のもとを訪ねて結婚を申し込み，それを花嫁候補の両親が承諾してからでないと具体化しない．その日偶然訪ねてきていた親戚が，ハフィザにソウチが来たことを知ると，なんともいえないニヤニヤした表情を浮かべて，「あらまあ，むふふ，一番いいことが起きたのね」と私に目配せをしてきた．そもそもその夫婦がなんのためにハフィザを訪ねてきたのか事情を飲み込めていなかった私は，その時は親戚の表情の怪しさも，目配せの意味も，何もわからなかったのだが．

ハフィザは25歳．調査地では20歳前後で多くの娘には結婚話が持ち上がり，遅かれ早かれ嫁いでいく．25歳というと十分臺が立った年齢なので，なかなか花婿もみつかりにくい．彼女の父親が「あまり話が通じない」人物だったことと，数年前に母親を亡くしていたために，結婚話がなかなか具体化しなかった事情があるらしい．父親が述べたような人物であるために，親戚でもある住み込み先の主人がハフィザの父親に代

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科